
円堂女体化計画。番外編だ！

チャッピー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

円堂女体化計画。番外編だ！

【Nコード】

N6152X

【作者名】

チャッピー

【あらすじ】

『円堂女体化計画。』の番外編です。私の妄想がたつぷり詰まった作品ですので、良ければ見てください。

ガーベラ (豪円)

いつもの練習で着替えた後、円堂は豪炎寺に呼ばれて部室へ寄った。

少し風が冷たい。

もう冬になるのだろうか、と円堂は何となくため息を吐いた。

部室の明かりがついている。

影が見える。

豪炎寺だ。

ドアを開けて、その隙間から中を覗き見る。

「豪炎寺？」

「来たか。早く中に入れ、寒いだろ」

豪炎寺は部室の机に座っていて、こっちを見て優しく笑った。

不安が合ったが、豪炎寺が笑った事により円堂も緊張が解けた。

中に入って、円堂も机に座った。

「で、なんだよ？ 悩み事か？」

「いや、違う」

豪炎寺は立ち上がり、自分のロッカーを開け、ごそごそと中を探った。

円堂はそれをなんとなく見つめていた。

取り出したのは、オレンジ色の花。

机に座って、豪炎寺は円堂にその花を向けた。
受け取れ、ということらしい。

「すっげー綺麗な花だな」

「ああ、お前にぴったりな花だ。『ガーベラ』っていうんだ」

ガーベラ。

オレンジ色で、大きくて、見てみると元気がもらえるような、綺麗な花だった。

嬉しかったが、なぜいきなりこんな花を渡してくれるのか。

円堂は不思議に感じて頭を捻った。

そんな円堂を見て、豪炎寺は口を開いた。

「ガーベラの花言葉はな、『希望』とか『常に前進』とかだ」

「へえ、物知りだな！ 豪炎寺！」

「あと一つあるんだ」

真剣な顔をして円堂を見つめる。

円堂はその瞳に吸い込まれそうになった。

「それは、『我慢強さ』だ」

我慢強さ。

円堂は、豪炎寺の言葉を口の中で反芻した。

そして、豪炎寺は、円堂にゆっくりと近づいて優しく抱きしめた。
びっくりするほどの暖かい抱き心地に、円堂は体を預けて力を抜く。

豪炎寺の吐息が聞こえ、なぜか顔が熱くなる。

「我慢しているだろう、守」

「！」

「強いのは良いことだ。でも、たまには素直になるのも大切なんだ」

一つ一つの言葉が、円堂の胸に深く突き刺さる。

豪炎寺の抱きしめる力が強くなる。

それがきっかけとなり、円堂の大きな瞳から大粒の涙がこぼれ落ちた。

「俺……俺………」

「キャプテンで、いつも笑っているお前だって、苦しいことだってある。

我慢しないでくれ。

俺の前だけでは………素直でいてくれないか？」

「……………うん、ありがとう、修也」

豪炎寺の思いを理解して、二人は熱い口づけを交わした。

円堂は、苦しみを隠して笑う自分に疲れていた。

女を隠して生活する自分に、苦痛を感じていた。

それを周りには隠しているつもりだったのに、豪炎寺にはわかっていていた。

だから、苦しみを理解してくれる豪炎寺が好きだった。

心の中で、何度も何度もありがとう、と唱えた。

「修也」

「なんだ？」

「いつまでも一緒に居てくれるか？」

「当たり前だろ」

そんな二人を見ていたガーベラは、その後、円堂の部屋で大切に花瓶に添えられた。

カーネーション (鬼円)

円堂は、鬼道に呼ばれて、鬼道家にお邪魔していた。

鬼道の部屋はやっぱり広い。

部屋を見渡して、円堂は大きくため息を吐いた。

「いいなあ〜大きくて」

「それならうちに住めばいい」

「……………マジで？」

「冗談だ」

ちえー、と口を尖らせる円堂。

それを見て、鬼道は彼女に愛おしさを感じるのだった。

鬼道は自分の机の引き出しを開く。

そこに合ったのは、真っ赤なカーネーションだった。

円堂に渡すためにわざわざ遠くの花屋まで買いに行ったのだが、本人が目の前にいるとなんだか渡す勇気がなくなったのである。

(渡せるわけがない……………)

引き出しをしめる。

すると、円堂がこっちを見ていた。

見られたか？

「なに？ そんな何か入ってるのか？」

「は、入ってない」

「あー怪しい！」

円堂はぷっくりと頬を膨らませて言い返した。
それが何とも可愛いのだが、見られては困る！

鬼道は、引き出しの前に立って苦笑いを浮かべた。

円堂もおもしろくなかったようで、鬼道の引き出しを開けようと
必死になる。

「見せろよー！！」

「な、何もないと言っているだろう！！」

「じゃあ見せてくれたっていいじゃん！！」

「だめだ！」

頑なに引き出しの前から動かない鬼道。

円堂は、今の状況がなんだかおもしろく感じてきてしまった。

「じゃこれ貰おっ！」

「あ！」

円堂は、鬼道のゴーグルをひょいっと外した。

鬼道は勢い余って円堂からゴーグルを取り戻そうと引き出しを離れた。

チャンス。

円堂はにやりと笑って引き出しへ疾走。

鬼道は驚きで顔を歪ませ今の行為を後悔。

引き出しを開けた。

鬼道の、真っ赤な瞳が大きく見開かれる。

「うわぁ……綺麗………」

「……恥ずかしいじゃないか」

「カーネーションだぁ……」

引き出しに入っていたカーネーションを、珍しそうに手にとって眺める円堂。

鬼道はというと、恥ずかしさできよろきよろしていた。

「お前にあげるために買ったんだが、渡す勇気がなくな……」
「わ、ありがとゝ鬼道」

ふう、とため息を吐いて円堂の隣りに座る。
少し遠い目で外を眺めて、鬼道は呟いた。

「熱愛、か」

赤いカーネーションの花言葉である。

「熱愛？」

「ああ、他にも『純粋な愛情』とかもある」
「なるほど………」

円堂はそう言うと、カーネーションと鬼道を交互に見ながらくすくすと笑った。

鬼道はなにを笑っているのか気になり、カーネーションを何となく見つめた。

『熱愛』という言葉にふさわしく、燃えるような赤。なぜこれを買ったのだろう、と今になって少し後悔した。

「鬼道」

「なんだ？」

「鬼道も『熱愛』だな」

「……は？」

「だって、鬼道の目もカーネーションと同じ色してるじゃん！」

鬼道ははっとして円堂を見つめる。

見ているこっちが幸せになれるような、満面の笑み。

その大きな瞳に映る、自分の赤い瞳。

本当にこいつは……………。

鬼道は、円堂をぎゅっと抱きしめ、唇に触れるだけのキスをした。

「俺はいつだって守が好きだからな」

「俺も有人好きだぞ！」

二人は顔を見合って笑い合った。

アヤメ (風円)

風丸は、円堂を雷門中の裏山に誘った。
山のふもとで、円堂に訪ねられる。

「なあ、これからどこにいくんだ？」

「ついてこい。見せたいものがあるんだ」

風丸は、円堂の小さい手を握って、どんどん山道を登っていった。

たまに、木の枝に引っかかったり、蛇に出会ったりとハプニングが多々起きるたびに、

二人はびっくりして騒いで、そして最後には笑いながら楽しく山を登った。

歩いて30分ほどすると、疲れた二人には丁度良かったように、川が流れていた。

乾いた喉を潤すため、円堂は走って川の側に寄った。

「気をつけろよー、落ちたりしたら大変だからな」

「わかってるよ！　ってうわ！！」

激しい水飛沫と音がして、円堂が消えた。
いや、落ちた。

風丸は今起きたことを理解するのに3秒。
そして円堂を引き上げるまで45秒かった。

びしょびしょになり、ぷはー、と息をはいて上がった円堂は、
なんというか、色っぽくて風丸は目のやり場に困ったのだった。

「どーしょ……………服が……………」

「とりあえず脱げ。風邪引くだろ？」

「おう」

「いやいや！　ここで脱ぐな！　茂みに隠れろ！！」

いきなりジャージのファスナーを風丸の前で下げる円堂。

風丸に怒鳴られ、渋々茂みへ歩いていった。

風丸は、円堂が隠れた茂みの方へ自分の上のジャージを投げた。

「これ着てろよ」

「サンキュー風丸！」

少しくぐもった声で応答する。

はぁ、と風丸はため息を吐いて俯いた。

そして、濡れた円堂を思い出し、顔が赤くなるのがわかった。

数分後、円堂はぶかぶかのジャージを着て出てきた。

やっぱり女子だからなのか、男子用のジャージは大きめらしい。

とりあえず、足とかも隠れているのでよしとしようと、風丸は思った。

これはこれで良いのだが。

「じゃ、行くか。服は持ったか？」

「うん！ 行こう！」

何となく、二人は手をつないで歩いた。

二人の手の温もりが伝わり、不思議な温かさを感じる。

これが、幸せだろうか、と風丸は心の中で呟いて、軽く笑った。

しばらくして、二人の横に、紫の花が一面に広がった野原があった。

美しい、紫色に、円堂はため息が出る。

「これはな、アヤメっていうんだ」

「？ 風丸、これを見せるためにここまでつれてきたのか？」

「ああ、今の時期はすごく綺麗だからな、円堂と一緒に見たかった」

熱っぽい目を円堂に向け、風丸は微笑む。

円堂も、そんな風丸を見て、頬が緩んだ。

すると、風丸が跪いて、円堂の手を取り直した。

その光景はまるで、騎士が姫に誓いをするような。

「守。アヤメの花言葉を知っているか？」

「う、ううん」

ドキドキして、円堂は答える。

すると、風丸は、円堂の手の甲にキスをして、答えた。

「『あなたを大切にします』」

山の中で、無限に広がるアヤメの前。

少年は、少女に誓った。

スイートピー (二円)

ブラジルで行われているフットボールフロンティアインターナショナル。

イナズマジャパンは、順調に勝ち進んでいる。

今日は、久々のイナズマジャパンの休日。

円堂は、出ていくために荷物をまとめていた。

「キャプテン！ どこかお出掛けですか？」

「ああ、ちょっと出てくるよ」

不思議そうに聞いてくる虎丸に、笑顔で受け答える。

「帰ってきたらオレの特訓に付き合ってくださいね！」

「わかったぜ。帰るまで待っていてくれよな」

はい！ と満面の笑みで頷き、グラウンドへ消えていった。

サッカーをする虎丸を、何とも言えない感情で見つめている円堂。

「……………バスに遅れちゃうな」

そう呟いて、近くのバス停へ急ぎ足で向かった。

~~~~~



円堂が向かったのは、ブラジル内で一番大きな総合病院。  
海外からの患者も積極的に受け入れたり、受け入れを提案されたりする、

腕利きの病院らしい。

ここでは、円堂の想い人が治療を行っているのであった。

「えっと、たしか……………」

病室番号を思い出し、階段を上る。

自分の足音が聞こえる意外に、なにかの作業を行っているのか、  
がさがさと音がする。

病院独特の香りが鼻をツンとついた。

目的の病室につく。

ドアを開けると、そこにいた。

「失礼します」

「……………」

「一之瀬？」

円堂の想い人————一之瀬は、ベットに横たわって寝息を立てていた。

寝ているのだろう。

円堂は起こさないように足音を殺して、ベットに近づいた。

彼のかっこいい顔に、円堂は顔を近づける。

かすかな吐息が少しだけかかる。

すると、円堂はぎゅっと一之瀬の方に引っ張られた。

「守っ  
っ  
っ  
っ  
っ  
っ  
!!  
!!  
!!  
!!  
!!

会いたかったよつつつつつ！！！！！」

「きやあつ！ 一之瀬つ！」

「まさか守から顔を近づけてくれるなんてね！ 嬉しいよ！！」

ぎゆうぎゆうと力いっぱいに抱きしめる一之瀬。

嬉しさに浸っていたが、突然呻き始めた。

「だ、大丈夫か!？」

「い、いや、平気だよつ、ゴホッ」

「ご、ごめんな……」

円堂が申し訳なさうにしゅん、と項垂れる。

すると、先ほどの幼さの残る笑みとはガラリと変わり、

大人のような笑みを浮かべて一之瀬は円堂を優しく抱きしめる。

「いいさ。俺には守がいるから。」

それが俺にとっては『永遠の喜び』さ」

「そうか。よかった」

ほっとしたように息を吐く。

一之瀬は、横の机に置いてあるスイートピーを指さして笑った。

「『永遠の喜び』っていうのはこのスイートピーの花言葉なんだ。」

素敵と思わないか？ 俺と守にふさわしい花だと俺は思うんだ」  
「……『永遠の喜び』かぁ……………」

円堂は、うっとりしたように瞳を潤ませ、真っ白なスイートピーを見つめる。

「俺の『永遠の喜び』は、一之瀬とサッカーが出来ることかなあ……」

「守……………」

大丈夫。俺は不死鳥だから、また守と熱いサッカーが出来るよ」

「一哉……………」

「約束する」

「俺も」

一之瀬は、円堂の手を握って優しい視線を向ける。

暖かい日の光が射し込む病室で、一つの約束がされた。

## スノードロップ (吹円)

夏にあれだけ大盛り上がりした稲妻町にも、時が過ぎ冬がやって来た。

冬休みで正月も明け、町は落ち着きを取り戻していった。雪がちらついて、時にたくさんつもる。

円堂は、久々にボールを蹴ろうと、マフラーを巻いて外に出た。すると、円堂宅のポストに、薄水色の手紙が入っていた。見慣れた字でかかれていたのは。

『吹雪 士郎』

吹雪だ！

叫びたくなるのを必死でこらえ、部屋に戻って手紙を開ける。

キャプテンへ

久しぶりだね。元気にしてるかな？

ボクのことは覚えてるよね？元イナズマキャラバンにいた吹雪だよ。もうエイリア学園のことも世界大会も終わっちゃったから、ボクは北海道で楽しくやっています。

お正月でもキャプテンは「サッカーしたい」ってうずうずしてるだろうね。ボクも親戚の集まりなんかより早く外に出たくて仕方な

いよ。

さて、えっと北海道は冬休みが長いんだよね。それで今度キャプテンの家に遊びにいこうかなって思ってるんだ。多分この手紙がキャプテンに届いて数日後くらいだね。もし予定が空いてたら嬉しいんだけど、どうかな？

みんなにも会いたいけど一番会いたいのはキャプテンだよ！君のことだから相変わらずサッカー大好きなんだろうね。変わってないといいな。

それといたいことがあるんだよ。

だから、今度、稲妻町に遊びに行くね。

ちょっと長いけどこれで終わります。

今度会ったらサッカーしようね！

吹雪より

「マジで！！ 吹雪が来るんだあ！！！！！！」

円堂は、大声で叫んだ。

~~~~~

手紙が来て二日後、吹雪はあのマフラーを身につけて円堂の家にやって来た。

チャイムが鳴る。

円堂は、吹雪が来るまで一時も家を離れず、吹雪をじっと待っていた。

だから、吹雪が来たときはものすごく喜んで、吹雪に飛びついた。

「よく来たなっ!!」

「ははは。久しぶりだね!」

笑い合って、円堂は吹雪を自分の家に招いた。

部屋には、暖かいココアとぜんざいが用意されていた。

「ありがとー母ちゃん!!」

二人でぜんざいにぱくつく。

すると、吹雪が思い出したように目を見開いて言う。

「あ、キャプテンに渡したいものがあるんだ」

吹雪は、ごそごとポケットの中を探り、一枚の写真と種を取らした。

なにかよくわからず、円堂は不思議そうな顔をして首を傾げる。

机の上に、写真が置かれる。
真っ白な花の写真だった。

「この花はね、スノードロップっていうんだ。

飛行機で来たから写真と種しか持って来られなかったんだけど、
綺麗な花なんだよ」

「へえ！ これ植えたらこの花が咲くのか？」

「うん。キャプテンにあげるね」

「ありがと！」

嬉しそうに種を掲げる円堂を、嬉しそうに見つめる吹雪。

「スノードロップにはお話があるんだよ」

「どんなどんな？」

「うんとね。」

エデンの園を追われたアダムとイヴが、冷たい雪の国を彷徨うんだ。

雪の中の寒さと、どうすればよいかわからない絶望に二人は包まれる。

するとそんな二人の前に天使が現れて、暖かい春は来るよ、と慰めるんだよ。

そうして天使が雪に触ると雪が溶けていく。

その溶けた雪の滴がこの花らしいんだ」

「なんだかメルヘンなお話だな」。

でもなんていうか、ロマンチックだな！」

にこっと笑う円堂。

その変わらない笑みに、ふと安心を覚える吹雪。

「それと。」

スノードロップには『初恋のため息』っていう花言葉があるんだ」

「は、初恋？」

「ボクもよくしてたなあ……………」

「だ、誰に誰に？」

円堂は興味津々と、不安な気持ちで胸がいっぱいになった。

自分が吹雪に対して何らかの感情を持っている事は、自分で良く知っていた。

だから、気になった。

吹雪は、そんな円堂を愛しく思った。

そして甘い笑みで、円堂に言った。

「君にだよ」

顔を真っ赤にして俯く円堂。

吹雪は、円堂の側に寄って優しく抱きしめた。

「遠く離れていた時だったため息を吐いてたけど。」

……………もう、ため息を吐かなくて良いみたいだね」

円堂の薄い唇に、自分の唇を重ねる。

ぜんざいのおかげか、ほんのちよっぴり甘いキス。

この二人にも、暖かい春は来たようである。

たんぽぽ (染円)

円堂達が良く練習に使用している河川敷。
今日は、染岡と二人で練習中のものである。

「いぞ染岡!!」

「おう！」

ドラゴンクラッシュ!!」

青い竜が染岡の蹴ったボールに食らいつくように飛んで、円堂へ飛び込んでいく。

しかし、円堂は苦にもせず、両手で止めて見せた。

チィ、と舌打ちをするが、それは円堂の強さを認めるものだった。

ボールを持ってニコリ、と笑いかける。

染岡は、円堂の笑顔が好きだった。

誰でも受け入れて、暖かくしてくれるような笑顔。

彼女の人柄が、その笑顔でわかるようだ。

「もうそろそろ休憩するか？」

「ああ、ちよっと動きすぎて肩こった」

「染岡が言ったらオヤジみてえだな！」

「なっ……お前！」

こっん、と円堂の頭を小突いて、染岡は優しく笑った。
確かにオヤジ顔は染岡の生まれつきである。

それに熱血の性格が加われば……………昭和風だ。

二人は横に並んで、河川敷の斜めの芝生に横たわった。

「あ、たんぽぽ」

顔の横に咲いていたたんぽぽを珍しそうに見る円堂。

「なんだお前、たんぽぽが珍しいか？」

「珍しくはないけど、可愛いよな！」

でも、ちよっと寂しそうだなあ……………」

「寂しそう？」

大きく頷いて見せる。

染岡は意味がよくわからなかった。

改めてみれば綺麗だが、日常的に見ている花を寂しい、などと言われるのは意味が分からない。

円堂は何を考えているのだろうか？

「だって、可愛い花なのにさ。」

草に隠れてたり、地面の隅っこに合ったり、目立たないよなあ」
「…………ま、そーいわれりゃそうだな」

何となく納得して、染岡は改めてたんぽぽを見る。

美しい黄色が太陽に照らされ、明るい光を放っている。

ぐん、と茎が伸びて、どこか生き生きしたイメージもあり、生命力も強い。

綿毛になって遠くまで行って、種族を存続させているのだから。

そんな強い花なのに、自分は当たり前のようにたんぽぽを見つけ
て何も思わない。

円堂はつくづくおもしろいやつだと、染岡は感じた。

「じゃあ、円堂が部屋に飾ってやればいいじゃねえか」
「え？」

「それですつとお前がたんぽぽを見てやれよ」

「……うん！」

明るく笑う彼女の顔は、たんぽぽに重なって見えた。

その笑顔が美しくて、顔が赤くなったのがわかった。

~~~~~

染岡は家に帰ると、自室である本を見つけた。

花言葉の本だ。

今日の事もあり、ふと気になって『た』で引いてみる。

ある。

たんぽぽは……。

「『真心の愛』か……………」

たんぽぽにも愛を注ぐ円堂に、ぴったりだと思う。

道の端っこに咲く目立たない花の方が、本当の美しさなんだな。

明日、円堂にこの言葉を教えてやろうと思った。

そして、いつか自分も『真心の愛』を円堂に注げる人になりたい。  
そう決意した染岡だった。

## スイセン (ヒロ円)

稲妻町のとある花屋で真剣に花を選んでいるのはヒロトだ。

「う……何が守ちゃんに似合うかなあ……………」

適当に花を手に取り、360度回転させて、うーん、と首を捻る。  
そればかりの繰り返しでまったく決まらない。  
だんだんイライラしてきて、ヒロトは嫌になって店を出た。

店を出てから冷たい風が体に当たって、ようやく落ち着きを取り戻した。

「はあ……………」

大きくため息を吐いて、近くにあったベンチに座る。  
額に手を当てて頬をぱちん、と叩いた。

数日後は、円堂の誕生日である。

それで、円堂に似合いそうな花を探しているのだが、なかなか見つからない。

もうすぐそこまで迫ってきているというのに。

考えると、またイライラが戻ってくる。

そんな自分が、バカらしかった。

いつのまにか日が傾き、暗くなり始めていた。

もう帰らないと、とベンチを立った時に、ふわりと良い香りが花をくすぐった。

どこからだろう、辺りを見回すとベンチの裏に隠れていたのは……

「スイセン？」

普通、スイセンは白いモノが多いが、そのスイセンは黄色い。

なんだか、見つめれば見つめるほどその黄色に引き込まれていく。

スイセンの暖かい黄色は、円堂のイメージによく似ていた。

~~~~~

結局、ヒロトはスイセンを持って帰ってしまった。

大好きな円堂に共通してしまったものを無視して帰る事は出来なかった。

何となくぼーっとしてスイセンを見ていると、テレビで言った言葉が耳に届いた。

『今日のラッキーフラワーは黄色いスイセンです！』

花言葉は……『愛に応えて』ですって!!』

『愛に応えて』

その言葉を聞いて、これを円堂に届けようと決心した。
もう一つ、届けたい言葉もあった。

~~~~~

円堂守の誕生日。

ヒロトは円堂の家に行って、チャイムを鳴らす。

彼女が出てきた時、ヒロトは大きな声で祝福した。

「ハッピーバースデー！ 守！」  
「うわっ！ ヒロトっ！？」



呆氣に取られた彼女を、ぎゅっと抱きしめる。

すると、円堂は頬を緩めて笑顔になる。

改めて、この花に似てると思った。

「守にプレゼントがあるんだ」

スイセンを渡す。

花の甘い香りが、二人を包み込む。

「花言葉は、『愛に応えて』なんだよ」

「へえ、なんか恥ずかしいな……」

顔を赤らめて円堂は俯く。

ここで言うしかない！

自分に言い聞かせて、ヒロトは円堂に向き直った。

「結婚しよう、守。幸せにするから」

愛に応えてください。

もちろん、YES、ですよ？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6152x/>

---

円堂女体化計画。番外編だ！

2011年12月3日20時50分発行